

『八百館来文』に見られる 八百文字表記漢語について

更科慎一

1. はじめに

1. 1. 『八百館訳語』

『八百館訳語』は、明清代に朝廷で編纂された異言語学習叢書『華夷訳語』のうち八百語を扱った書である。『華夷訳語』は体裁や編纂された機関の違いにより数種に分類される¹が、八百語のものは、四夷館で編纂されたいわゆる乙種本のみである。

四夷館は、明朝と交渉のあった諸民族の言語で書かれた文書の読解と作成を任務とする機関で、対象地域ごとに館を分かっていた。四夷館自体の設立は永楽5年（1407）であるが、八百館の設立は正徳6年（1511）である²。

八百語はタイ諸語の一種で、現在のタイ北部にあったランナータイ王国の言語であるとされる。西田（2000：102）は、ランナータイ王国の都があったチェンマイに現在話されるチェンマイ語について、「八百語から直接伝承したものと考えて差支えないように思われる」との認識を示している。『八百館訳語』自体の中に「八百」*mōng biǎng jiǎng hmai* という地名が見え、*biǎng jiǎng hmai* はチェンマイを指すことが、先人によって指摘されている³。

1. 2. 『八百館訳語』の構成

『八百館訳語』は、乙種本の他の語種の『華夷訳語』と同様、対訳語彙である「雑字」と、対訳文例集である「来文」の二つの部分から成る。「雑字」では八百語の語句項目が“××門”と名付けられた意味範疇の下に分類され、各項目には見出し漢語と八百語対訳（八百文字と漢字音訳）が配されている。「来文」は八百語が通用していた各地方から明の朝廷等に於てた通信文を主な内容とする。

一、雑字。正編757項、続編304項、計1061項。

乙種本華夷訳語の雑字にはしばしば、分類語彙の後ろに、さらに語彙項目が追加されていることがある。本稿では、主要な分類語彙を「正編」と呼び、後ろに付された追加の語彙項目を「続編」と総称する。本稿筆者がこれまで何らかの形で利用できた

¹ 『華夷訳語』という書物の種別や体裁については、石田（1930/1973）参照。

² 四夷館に関しては、神田（1927/1949）を参照。

³ 山本（1936：768）、泉井（1953：19）を参照。

ものは、正編は復旦大学蔵本（愛如生電子本による）、パリ・アジア協会本（東洋文庫蔵の写真による）、Amiot 氏将来本（京大文学部蔵の写真による）、ベルリン本（即ち Hirth 氏将来本。現所蔵先の Staatbibliothek zu Berlin が web 上に⁴公開している写真による）及び Edkins 旧蔵本（現所蔵先の British Museum が web 上に⁵公開している写真による）であり、続編は東洋文庫本（XI-5-2：東洋文庫にて現物を閲覧）、内藤湖南旧蔵杏雨書屋本（杏雨書屋蔵の写真による）、Hirth 氏将来本（上記の website による）、復旦大学蔵本（上記電子本による）、パリ・アジア協会本（上記写真による）である。復旦大学本は正編のみで続編がなく、一方杏雨文庫本は続編だけがあって正編がない。この二本は同一の本が分割され、正編が復旦大に渡り、続編が内藤湖南の手に渡ったものかもしれない。Edkins 旧蔵大英博物館本は、正編の全部と、「続添」の最初の16項を含む。

なお続編304項は、「続添」と称する38項と、テキストにより「新增」「続増」などと称する266項から成る。「続添」部分において、東洋文庫本には2つの欠項があり、杏雨書屋本には10の欠項がある。「続添」38項は二字句で、おそらくは来文から抽出されたものである。「新增」266項は天文、地理、時令（十二支と十干）、人事の各門の内容を含む。

本稿で雑字の音訳漢字を資料として扱う場合は原則としてベルリン本によるが、ベルリン本が明らかに誤字である場合は他本を参考にして校訂したものに従う。

二、来文。

来文は100字前後の漢文の文章（及び、その八百語訳文）がいくつか収められた文例集である。本稿筆者がこれまで利用できたものは、ベルリン本と、内閣文庫本⁶である。東洋文庫本は、『八百語訳語』に対する全面的研究である泉井（1953）に基づく。

東洋文庫本は30通、ベルリン本は30通、内閣文庫本は10通の来文がそれぞれ収められ、三本全体の異なり通数は43通となる。東洋文庫本とベルリン本に共通する来文が18通あり、内閣文庫本の10通のうちベルリン本と共通の来文が8通、東洋文庫本と共通の来文は2通ある。三本全てに共通する来文は7通である。

本稿で主な資料とするのは、ベルリン本の、後に述べる“八百文字で漢語音を表記した部分”（総数1976音節、異なり形態素数は366）である。

⁴ <https://digital.staatsbibliothek-berlin.de/suche/> から「hua yi yi yu」で検索。

⁵ <http://www.bl.uk/manuscripts/FullDisplay.aspx?ref=15344.d.10/6>。

⁶ 国立公文書館デジタルアーカイブ提供の画像（<https://www.digital.archives.go.jp/DAS/meta/listPhoto?LANG=default&BID=F100000000000095087&ID=M2015090713161711286&TYPE=>）による。

1. 3. 来文漢文面の異同

東洋文庫本の漢文面は、ベルリン本と比較可能な18通すべてにおいて、字数がベルリン本よりも少ない。例として、東洋文庫本第3通の漢文面を、これと対応するベルリン本第2通と比較してみよう。×は、他本にあって該当の本に無い文字を表す。

(東洋)：孟良府土官知府刀孟扛差来頭目招八人等奏

(伯林)：孟良府土官知府刀孟扛差来頭目招八人等奏

(東洋)：天皇帝知道×奴婢以禮×勘合三年一貢×過千山萬水××××纔得到京都

(伯林)：天皇帝知道我奴婢以禮部勘合三年一貢經過千山萬水辛苦無数纔得到京×

(東洋)：見了天皇帝金面蒙賞賜××××××××并大筵宴

(伯林)：見了天皇帝金面蒙賞賜衣服線段靴帽等件并大筵宴

(東洋)：回去時乞賜勅書××管東地方夷人不敢作歹奏得聖旨知道

(伯林)：回去時乞賜勅書賣回地方管東夷人不敢作歹奏得聖旨知道

東洋文庫本が原文の内容を削ったのか、それとも他本が原文に文言を付け加えたのか。この問題を解く鍵として、来文各篇の末尾に記された数字がある。東洋文庫本とベルリン本の各篇の末尾には、八百語で、ある数値が記されている（内閣文庫本には、数値は記されていない）。この数値は来文毎に異なり、東洋文庫本の場合、最も少ない第24通で50、最も多い第1通は127である。第1通を例にとると、八百語文面の本文が終わったところで

nīng ray sǎng sib cād sī

と書かれている。nīng ray sǎng sib cād は、雑字の数目門を参考にして、「一-百-二-十-七」と読める。形態素 sī は、雑字・器用門 (342) 「字」hnang sī⁷に見え、“writing” (文書) の意味である⁸。泉井 (1953:60) では、この部分を「一百二十七葉」と訳し、注釈に「おそらくこの来文の整理番号にすぎぬと思われる」と記している。

ベルリン本にも同様の数値が記されており、値はやはり来文毎に異なる。ベルリン本を通覧すると、この数は漢文面（八百語文面ではなく）の字数と一致するか、それよりも1字多い/少ない数である場合が多い⁹。このことから推測するに、この数は、

⁷ 以下、雑字の語彙項目を引用する場合、「」で見出し漢語を、“ ” で音訳漢字を示し、語彙項目の通し番号（泉井 (1953) に見える）をアラビア数字で示す。

⁸ Li (1977: 154)、9.1の比較語彙リスト No.43。

⁹ ベルリン本の30通のうち、19通では篇末記載の数が漢文の字数と一致し、7通では両者の差が1、4通では両者の差が6~12である。

来文編纂当初、訳字生が漢文面を筆写する時脱字を防ぐ目的でつけられたものではな
かろうか。漢字ではなく八百語で記したのは、八百語の数詞の解読練習の意味があっ
たのであろう。ところが、ベルリン本が成立した頃には、一部の来文の漢文面が改変
され、数値が若干ずれてきたものと思われる。

東洋文庫本に至って、篇末に記載された数と漢文面の字数は全く一致しなくなる。
全ての来文において、漢文面の字数は篇末記載の数値よりも小さくなっており、後者
から前者を引いた値は、30通のうちの3通が10以下であるのを除き皆10以上である。
例えば第5通では、篇末に記載された値が90であるのに対して、漢文面の字数は63で
あって、27も少なくなっている。注目すべきは、東洋文庫本の篇末に記された数字
が、内容上それと対応するベルリン本の篇末の数字と一致する来文がかなりあること
であり、例えば東洋文庫本第3, 4, 5, 7, 8, 10, 13, 14, 16, 17, 23通がそうである。
このことから、東洋文庫本において、もとの来文の漢文面が削られて短くなっている
のに対し、ベルリン本が比較的もとの漢文面をとどめていることがわかる。

上掲の来文においては、東洋文庫本（第3通）、ベルリン本（第2通）ともに、八百
語文面末尾に「97」という数が記してあり、一方漢文面の字数は、東洋文庫本が81字、
ベルリン本は97字であるから、記載された数字はベルリン本の漢文面の字数と一致す
る。泉井（1953）はベルリン本を利用しなかったため、「整理番号」と解したのも無
理からぬことであった。

以上、篇末の数字と漢文の文字数の比較から、東洋文庫本の来文は原文の内容をか
なり省略したものであり、ベルリン本の方が原姿に近いことがわかる。

1. 4. 八百語文面の異同

来文の八百語文面は、全体に漢文面の逐語訳であり、漢文の一字一句がほぼ忠実に
八百語の単語に置き換えられているが、東洋文庫本においては、第2, 3, 4通の八百
語文面中に、漢文と対応しない箇所が複数ある。この三通の来文はそれぞれ、ベルリ
ン本の第1, 2, 3通に対応するが、東洋文庫本の八百語文面をベルリン本の漢文面と
突き合わせると、きれいに対応する。例として、上掲の東洋文庫本第3通の八百語文
面を、東洋文庫本及びベルリン本の漢語文面と比較してみると次のようである¹⁰。

(東洋漢文)：孟 良 府 土 官 知 府 刀 孟 扛 差 来 頭 目 招
(東洋八百)：Möõng khõn vuu dhuuk kãån cii vuu Daaw möõng kang jai maa naay möõng cau'
(伯林漢文)：孟 良 府 土 官 知 府 刀 孟 扛 差 来 頭 目 招

¹⁰ 八百文字のローマ字転写は泉井（1953）に基づき、本項での転写方式（2.2参照）に従って改めてある。

(東洋漢文)：八 人 等 奏 天皇帝 知道 × 奴婢 依 禮 × 勸
 (東洋八百)：paa γ̃an dang hlaay hūai cau' lum vaa' hī ruu guu khai' taam gaam lii puu khan
 (伯林漢文)：八 人 等 奏 天皇帝 知道 我 奴婢 依 禮 部 勸

(東洋漢文)：合 三 年 一 貢 × 過 千 山 萬 水 × × × 纔 得
 (東洋八百)：γ̃a saam pii nīng kung bīin γ̃aam ban Day hmuun naam brak cai Bau mii nab cing Dai
 (伯林漢文)：合 三 年 一 貢 經 過 千 山 萬 水 辛 苦 無 數 纔 得

(東洋漢文)：到 京 都 見 了 天皇帝 金 面 蒙 賞賜 × × × × × ×
 (東洋八百)：thōng king han lāa cau' lum vaa' γ̃am hnaa Dai rang-wan sōo saay rāa-laay kub kluub
 (伯林漢文)：到 京 見 了 天皇帝 金 面 蒙 賞賜 衣 服 線 段 靴 帽

(東洋漢文)：× × 并 大 筵宴 回 去 時 乞 賜 勅書 管束^(注)
 (東洋八百)：juu 'an ping hñai hlau-hlūang γ̃i-bai möö khi plāng-hī lay-cee-hlōng 'au möö wai
 (伯林漢文)：等 件 并 大 筵宴 回 去 時 乞 賜 勅書 賣 回

(東洋漢文)：地 方 × × 夷 人 不 敢 作 歹 奏 得 聖旨 知 道
 (東洋八百)：Baan möōng tāang plāang γ̃aān dai Bau gāan ye' raay hūai Dai 'aad ñaa hī ruu
 (伯林漢文)：地 方 管 束 夷 人 不 敢 作 歹 奏 得 聖旨 知 道

(注) 東洋文庫本の“管束”は、八百語文面との対応から言えば、ベルリン本の漢文文面がそうであるように“地方”と“夷人”の間にあるべきであるが、この位置にあっても漢文として意味は通じる。

この比較からも、東洋文庫本の漢文面が後になって削られたものであることがわかる。但し漢文面節略による八百語文面との対訳関係の不整合は、他に第5通に若干見られるものの、第6通以降は見られなくなり、漢文面と八百語文面が比較的厳密な対訳関係になる。

来文の八百語文面には、もう一つ、本項のテーマにとって非常に重要な異同状況がある。それは、ベルリン本に、漢文面を八百文字によって表音した部分が含まれていることである。一般に華夷訳語の来文は、漢文面と、それを学習対象言語に翻訳した文面から成る。華夷訳語の一種で、八百語と同じタイ諸語の一種である百夷語を対象とする『百夷館訳語』の来文は、一段一段の百夷語訳文に続いて、同じ部分の漢文面を一字一字、百夷文字に音訳した部分が続くことが、泉井（1949）以来知られてい

る¹¹。また、同じく華夷訳語の一種で緬甸語を扱った『緬甸館訳語』の来文は、緬甸語対訳文の全文が漢文の緬甸文字音写である¹²。

八百館来文の八百文字表記漢語は、百夷館来文と類似した方式によって、来文各篇に挿入されている。即ち、来文の一区切りの内容が意識された後、ある種の句読記号を置いて、同じ部分の音訳がなされる、という形式になっている。八百館来文を扱った先行研究である泉井（1953）はこの音訳部分を欠いた東洋文庫本を利用しているため、当然、音訳部分には言及していない。ベルリン本に見られるこれらの八百文字表記漢語こそが、本稿の主要な研究対象である。

2. 八百語の文字とその転写について

2. 1. 八百文字の性格とその研究

八百語の文字は、古代インドのブラーフミー文字から派生したいわゆるインド系文字であり、その中でも、現在のタイ文字、ラオ文字、タイ＝ルー（西双版纳傣）文字などと同じく、古代クメール文字を継承した系統に属する¹³。

タイ諸語では、音節初頭子音が有声か無声かによって声調が“高”と“低”に二分される¹⁴という音韻変化が起こったが、タイ族がクメール族から文字を導入した時点では、この変化はまだ起こっていなかったため、閉鎖（破擦）音系列子音の有声と無声の字母が、タイ語の有声子音と無声子音の表記にそのままあてがわれた。タイ諸語最古の文献であるラームカムハエン王碑文はこの状態を示している。有声子音の無声化と、それに伴う声調調値の高低差の音韻化以後も、かつての有声/無声子音の別を根柢とした文字綴りは継承されたため、字源的に無声である字母と有声である字母とが対を成し、同一の子音音素かつ“高”声調、“低”声調のいずれかを担いつつ現れるという分布様相となり、結果的には声調の区別を表示する結果となった。一般に、“高”声調と共起する子音字母は「高子音（字母）」、“低”声調と共起する子音字母は「低子音（字母）」と呼ばれている。実際のタイ諸語ではこのほか、歴史的な無声有気音や無声摩擦音のカテゴリに属する子音と共起する声調が、他の無声音カテゴリの場合と異なる振る舞いをしたため、例えばタイ（シャム）文字では、共起する声調群に基づく字母の区分が“高”“中”“低”の三分になっているが、一つ一つの子音音素

¹¹ 泉井（1953）の他、更科（近刊）が百夷館来文の漢語音表記を扱っている。

¹² 萩原（1965：25）。西田（1972）は、来文の全文を転写し、語学的考察を付している。

¹³ 西田（2001b：795）。

¹⁴ この“高”と“低”は調類群に対する便宜的呼称であり、声調調値を描写する意図はない。現代のタイ諸語においても、“高”声調の調値が必ずしも高くなく、“低”声調の調値が必ずしも低くない点、同様の声調分裂を歴史上経験した漢語諸方言の状況と同じである。

に対して三つの字母が鼎立することはなく、一つの子音音素と対応する字母は、依然として高（中）：低の二項対立であると考えてよい。

注意すべきは、タイ（シャム）文字、タイ＝ルー文字などでは、インド系文字において有声と無声の対立を持たない摩擦音、鼻音、流音、接近音にも、高子音字母と低子音字母の区別があることである。古代のタイ語には、有声摩擦音 /f/, /s/, /x/ に対して有声の対応物 /v/, /z/, /ɣ/ があって、後者を表記する字母が新造されている。また、元来有声で、従って“低”子音である鼻音・流音・半母音に対して、{h} が前置された子音結合の書写形式があって、現代のタイ諸語では（子音結合ではなく）単一の有声子音として発音され、声調との共起関係上は一個の“高”子音としてふるまう。李方桂（Li（1977））は、この種の子音は共通タイ語（Proto-Tai）においても /h/ との子音結合ではなく、単一の無声音（無声鼻音、無声流音、無声接近音など）であったと考えている。

なお、同じタイ諸語の文字でも、ビルマ文字から継承された百夷文字においては、子音字母が高音組と低音組に分かれることはない。百夷語においても有声子音の無声化や声調分裂自体は起こっていると考えられることから、ビルマ文字の導入がそれらの音韻変化の後だったと考えられる¹⁵。

『八百館訳語』に見える八百文字についての研究には、古く山本（1936）がある。山本（1936）においては、八百文字について、字母表を掲げ、「之をシャムの Rāma Kamhên 碑文の文字と比較すると、全部に亘って完全な類似が認められるのであって、その系統に関しては何等疑問をはさむべき余地がない」（山本（1936:775））としている。

泉井（1953）では、八百文字の完全な字母表と、各字母のラテンアルファベットに基づく「音価」を掲げ、字形的特徴・文字の用法・発音上の問題等について、ラオス文字、「チエンマイのラオス語」の文字、現代シャム文字、シャン語、百夷語などと比較している。八百文字の全体的性質については、「字系的にラオス文字ときわめて親近である」（泉井（1953：3））と指摘する。

西田（2001a：742-3）では、八百文字の字母表とそのそれぞれの「音価」を掲げているほか、「八百語音」（音訳漢字を材料に復元した八百語の再構音）を記している。字形と文字組織についても、主にシャム文字と比較しつつ、詳細に解説してある。八百文字の系統について、西田氏は、

八百文字の字形は明らかに現代シャム語の筆記体に近く、それを溯った暹羅文字と

¹⁵ タイ系諸言語の文字において子音字母が高音組と低音組に二分されていく言語史的過程、及び百夷語において、言語としては同じ過程を経ながら文字では高音組と低音組の区別がなされないことの違いについて、詳しくは西田（2001b：796）を参照。

同じ系統に属する。文字組織も暹羅文字とほぼ同質であり、雲南省西双版纳タイ族の古いタイ・ロ文字とも深い関わりを持っている。いわゆるタム（経典）文字ともごく近い関係にある。（西田（2001a：741））

と述べている。

Jana Igunma（2010）は、『八百館訳語』（Edkins 旧蔵本）の文字について、Kannika Wimonkasem の研究に言及されているファッカーム（Fak Kham）文字（1411-1827年の碑文がある）によく似ているとして、八百文字とファッカーム字母の対照を行っている。ローマ字転写は与えていない代わりに、各字母をラオス文字及びタイ文字と対照させている。

2. 2. ローマ字転写の要領

本稿では、八百文字（下表「字母」欄。ベルリン本の字形を本稿筆者がサインペンで模写。なお原書の八百文字は、毛筆で書かれているように見える）のローマ字転写として、西田（2001a：742-3）に示された子音字母・母音符号の「音価」をそのまま転写記号として利用する（下表で「転写」としたもの）が、一部改編したところがある。改変した部分については、*印に続けて西田（2001a）の用いた記号を明記した。子音字母については、西田（2001a）は表音漢字を材料に復元した「八百語音」を別に推定しているので、下表での掲出にあたりそれも引用した（「音声」の欄）。また、「H/L」の欄には、子音字母が字源上無声/有声のいずれの子音を表していたかに基づいて、高子音（H）/低子音（L）の別を記した。なお、以下の記述において、八百文字のローマ字転写を{ }に包み、それが音素標記や音声表記ではなく転写符号であることを明示することがある。

【子音字母】

字母	転写	音声	H/L	
	k	k	H	γ χ L
	kh	kh	H	*西田（2001a）の「音価」欄は G
	g	g	L	ng ŋ L
	χ	χ	H	D/d ʔd H
				*西田（2001a）の「音価」欄は 'd。泉井（1953）の転写は d。本稿では、音節初頭で D、音節末で d と転写する

*西田（2001a）の「音価」欄は qh

ᠲ t t H

ᠳ th₁ th H

* thの字形には二種類あり、本稿では th₁, th₂とするが、両字形に音韻上の区別は認められない。必要がない限り、区別せず th で転写する。

ᠳ th₂ th H

ᠰ d d L

*泉井(1953)の音価は d

ᠨ n n L

ᠴ c tɕ H

ᠵ ch tɕh H

ᠵ j dz L

ᠵ z s L

ᠵ ñ ŋ, j L

ᠪ B/b ʔb H

*西田(2001a)の「音価」欄は ʔb。泉井(1953)の転写は b。本稿では、音節初頭で B、音節末で b と転写する

ᠫ p p H

ᠬ ph ph H

ᠪ b b L

*泉井(1953)の音価は b

ᠮ m m L

ᠮ f f H

ᠮ v v L

ᠮ l l L

ᠮ r r L

ᠮ y/i j L

* i は介子音として用いられる場合。但し百夷文字とは異なり、初頭子音としての y と介子音としての i の間に字形上の違いはない

ᠮ w/ũ w L

* ũ は介子音として用いられる場合。但し百夷文字とは異なり、初頭子音としての w と介子音としての ũ の間に字形上の違いはない

ᠮ s s H

ᠮ h h H

ᠮ ' - H

*泉井(1953):「声門閉鎖」。

子音字母補足説明

- ・ kh, th, ch, ph は有気音字母であり、ローマ字二字に転写しているが文字としては一単位であるのに注意。ng も一個の軟口蓋鼻音であって、n と g の結合ではない。
- ・ この体系は、デーヴァナーガリーなどの有声有気音の系列を欠く。
- ・ ラームカムハエン碑文に見られる口蓋垂音(西田(2001a:742))ᠵ, ᠶ の字母を有する。その字形は、明らかに、kh, g を変形して作られたものである。この二字母の音価

を西田 (2001a) は qh, g としているが、本稿では g が後述する D, B と同系列であると誤解されることを防ぐため、泉井 (1953) において両字母を χ, γ と転写するのに従う。なお西田 (2001a) も、この両字母の八百語における実際の音価はともに摩擦音 [χ] で、{χ} は高声調音節に、{γ} は低声調音節にそれぞれ現れると推測している (西田 (2001a : 742))。

- ・デーヴァナーガリーなどの無声無気音系列の字母のうち、歯音の t と唇音の p に対応する八百文字は、一種の有声閉鎖音を表記している。この二子音は、李方桂氏がその「共通タイ語」において、閉鎖開放の直前に声門閉鎖が入る有声音 *ʔd, *ʔb を推定したものにあたり、西田 (2001a : 742) においては「実際の音価は復元推定しにくい」としつつ、ʔd, ʔb と表示している。一方泉井 (1953) では、この二字母を普通の d, b で表記している。本稿では、他のタイ諸語との比較の便のため、普通の d, b ではなく、大文字の D, B を用いて転写しておく。なお、暹羅語や八百語においては、この二子音とは別に普通の無声無気音 t, p も存在するが、それらを表記する文字は t, p の字形を変形したものとなっている。
- ・有声摩擦音字母 z, v がある。デーヴァナーガリーなどインド系文字には相当する字母がないため、前者は j、後者は b をそれぞれ変形して、新しい字母が作られている。

【結合子音字】

字母	転写	音声	H/L				
	kh	kh	H		hñ	ŋ, j	H
	phr	phr	H		hn	n	H
	gr	kh	L		hm	m	H
* 西田 (2001a) の八百語音欄は r を ʀ (無声化) とする					hr	r	H
* 同上	br	phr	L	(特殊結合字)			
* 同上					dh	dh	L

以上は結合字形 ligature を形成する。このほか、ligature を形成するに至っていない二子音連続として hl, hng, hw があり、hñ 等と同じ「h+[流音/鼻音]」の系列と見做すべきである。

【母音符号】

* 各符号の“----”のところに子音字母が入る。

 a  aa

 a  aa

 i  ii

* 西田 (2001a) では a; aa

 u  uu

 ö  öö

* 今 [y] としておく (下記「補足説明」参照)

 i  ii

* 西田 (2001a) では ui; uiu

 ai

 ee  ää

 au

* ä、西田 (2001a) では ε

 am

 o  oo

* いわゆる anusvāra、西田 (2001a) は「音価」なので am としているが本項は転写として am と表記する

母音符号補足説明

- ・他のインド系文字と同様、八百文字においては、母音は子音字母の周囲に符号をつけて表す。いかなる母音符号も附されない綴りは、その子音の後ろに短母音を添えて発音される。八百文字の場合、その短母音は ă である (但し、子音一個だけから構成される音節綴り字の場合、/ 符号が上につけられる)。
- ・八百文字には短母音と長母音の区別があり、それぞれに対して区別された符号が用いられている。ローマ字転写においては、長母音を母音字の重量によって表す。
- ・ö の音価については西田 (2001a) にもあまり明確には述べられていないが、「八百語 -ö- 母音は、[…中略…] 暹羅語 (更科注: 『暹羅館訳語』 の言語) とのちのシャム語では、これに -uă- が当たる場合と -ŭ- が対応する場合の2系列に分かれる」とした上で、「これは、暹羅語 (シャム語) では、祖形の -ŭ- と -uă- の弁別を保持しているのに対して、八百語では -ŭ- と -uă- (一部) を合流していたからであろう」とする。また、暹羅語 (シャム語) の -uă- の「残りの一部」は、八百語では長母音 öö の形をとっていた、としている (以上、西田 (2001a:744))。一方、西田 (2000:103) では、『八百館訳語』 雑字の単語「塩」klö¹⁶を引用し、これに kliă (更科注: す

¹⁶ 『八百館訳語』 雑字・飲食門 No.586、「塩」: 格勅、klö̆。西田氏が klö̆ と転写し klö̆̆ とはしないのは、誤記でなければ、八百語の開音節では長母音と短母音の対立がなく全て長くなるためわざわざ長母音を表記しなかったか、そのいずれかであろう。

なわち、klua) という音表記を附している。このことから、西田氏は、八百語の ö の長母音について、少なくとも一部分を ua) のような二重母音と見ていたらしいことがわかる。本稿では、ö について、i[u] から区別されるやや開いた奥舌非円唇母音として [ɤ] を当て、とりあえずの音価としておき、問題をこれ以上議論することを差し控えたい。

なお八百文字にはただ一つの声調符号(音節末に “ˊ” を置いて転写)があるが、本『訳語』ではごく散発的に用いられるだけであり、漢語音の表記にはほとんど活用されていないため、本稿の考察からは除外する。この符号については、3.2.1.1において再び触れる。

3. 『八百館訳語』 来文に見られる八百文字と漢字の対音資料

すでに述べたように、『八百館訳語』の雑字部分では、八百文字で表記された八百語が漢字音訳されており、来文(ベルリン本)部分では、逆に漢語音が八百文字で表記されている。このように、双方向の音訳が存在するのが本『訳語』の特色である。

本稿では、主に来文において八百文字表記された漢語音の様相を報告し、その対応関係を検証するため、必要に応じて、雑字部分の音訳漢字の八百 - 漢対音状況をも参照する。

3. 1. 声母の状況

声母の対応状況の記述においては、ベルリン本来文に出現した八百文字表記漢語について、声母類ごとに表を作成して各小節の冒頭に掲げる。各表の「八百字」欄に配置した八百文字の字母それぞれに対して、その字母が表記したと考えられる漢語音(厳密な考察を経た「再構音価」ではなく、百夷文字の音価及び近代漢語音の全般的状況から類推される便宜的、暫定的な表記)と、対応する漢語中古声母を掲げる。「例字」欄には、その字母の代表的使用例(音節形)を、最大三つまで、表記対象たる漢字と共に掲げる。

3. 1. 1. 唇音類

八百字	漢語音	古声母	例字
① p	p	幫, 並仄	paa 八, pii 婢被備, ping 并
② ph	ph	滂, 並平	phii 皮疋匹
③ b	p	幫	baa 把, bau 保宝飽, bii 比
④ br	ph	並平	brââm 盆, brai 牌, bruuy 陪

⑤ B	p	(“不”字)	Bau~Buu 不
	m	明	Bau 帽
⑥ m	m	明	maa 馬, mään 面, mään̄ 蒙
⑦ hm	m	明	hmai 売, hmuu 目
⑧ f	f	非, 敷, 奉	faa 発, faan 泛, fuu 夫付赴副美符父服
⑨ v	f	非, 敷	vaa' 法, van 番, vuu 撫府
⑩ w	∅合撮	疑	wää 月, wään 原, wuu 五悞
		微	waang 望, wii 尾, wun 文聞
		影, 云, 以, 匣	wuu 屋, waang 王, wii 与, waan 完
⑪ hw	∅合撮	微	hwaan 万
		影	hwii 慰

3.1.1.1. ① {p}(H) と③ {b}(L)。いずれも幫母あるいは並母仄声字を表記している¹⁷ことから、漢語の無声無気音 /p/ を表記したと解釈できる。「雑字」における両字母の対音もこれとほぼ同様である¹⁸。

3.1.1.2. ② {ph}(H) と④ {br}(L)。いずれも滂母あるいは並母平声字を表記しており、漢語の無声有気音 /ph/ に対応する。

④では {b} に介子音 -r- が加わっている。西田 (2001a) は、おそらくは「雑字」の音訳漢字を根拠に、④をはじめとする結合子音における -r- の発音を無声化した [r] と推定し、「両唇音のあとでは無声音化するか、あるいはすでに脱落していた」(西田 (2001a: 742)) と解釈した。br- の用例を雑字に求めてみると、「仏」(58) “普刺” bra' のように -r- が来母字で書きとめられている場合と、「胡椒」(218) “抹-皮” hmaak briik のように -r- が音訳に現れてこない場合とが混在している。そのいずれの場合も、rの直前の b- に対応する音訳漢字は有気音 (つまり、中古滂母もしくは並母平声) 字であり、後者は八百 {br} : 漢 /ph/ の対応を示す。このために、来文においては、br- 表記が漢語の有気音 /ph/ の表音に用いられ得たのである。

3.1.1.3. ⑤ {B}(H)。来文での使用例はたいへん少なく、“不” (幫母?) と“帽” (明母) の二字のみである¹⁹。雑字での対応関係は、{B} : 明母が3例、{B} : 幫 (並仄) 母が10例である。来文における漢語音表記例が少ないことは、{B} が漢語のいかなる声母とも似ていないためだと説明でき、閉鎖音であるにもかかわらず鼻音の明母とも関

¹⁷ 例外として、滂母字“片”が pään と表記されている。

¹⁸ 但し雑字の対音には、{b} : “彭” (並母平声) の例が見られる。本稿3.1.3.3末尾の議論を参照。

¹⁹ “不”には Bau, Buu の二通りの表記例があり、前者は八百語の否定辞 Bau をそのまま用いた綴りと見られる。

係することは、{B}の音声を持続部の長い完全な有声音であると想定すれば納得できる。西田(2001a)の音価 ?b は、そのような音としてふさわしいものであろう。

3.1.1.4. ⑥ {m}(L) と⑦ {hm}(H)。いずれも明母字を表記しており、漢語の /m/ に対応する。⑥ {m}の方が多く、{hm}の用例は“売”と“目”だけであるが、この二字はそれぞれ、{m}表記例と、次のような興味深い対をつくっている：

mai 買 : hmai 売 mu 母 : hmu 目

3.1.1.5. ⑧ {f}(H) と⑨ {v}(L)。西田(2001a)は、{v}が八百語においてなお有聲の音価を保っていたと考えているが、漢語音表記としては、どちらも非敷奉母の系統と対応し、{f}と同じく漢語音 /f/ を表記したと解釈できる。

3.1.1.6. ⑩ {w}(L) と⑪ {hw}(H)。八百文字の {w} はれっきとした子音字母であるが、これと対応する漢語音は声母ではなく合口介音である。この字母を以て表記される漢語声母は中古音の影母、喻母(云、以)、疑母、微母の各声母にわり、匣母にして現在 wán と発音される“完”も含む。以上は現代北京語などで全てゼロ声母となっている。

疑母について全体的状況を言えば、八百文字には {ŋ} が存在し、八百語に声母としての /ŋ/ が存在しているので、漢語において疑母が /ŋ/ 音を保存していれば当然 {ŋ} が用いられたはずである。実際には、来文において八百文字 {ŋ} を音節初頭に持つ漢字は“我”ŋáのみであって、かつ“我”は疑母の字である。従って、来文では、疑母の /ŋ/ の発音が“我”にのみ残っているが、他の疑母字はすでに鼻音性を失っている、すなわちゼロ声母化している状態が反映されている蓋然性が高い。

{w} を以て表記された漢字には撮口呼のものもある。八百語の母音体系中には前舌円唇狭母音 [y] がなく、八百文字の表記対象の漢語に撮口介音が存在したか否かを八百文字の綴りから確定することは困難であるが、“月、原、与”などに用いられた {w} から、表記対象の漢語が現代雲南方言の如き撮口呼が齊齒呼化した方言²⁰のではなく、現代北京語の如く合口性を保持した方言であったことがわかる。更に、“与”の八百文字表音が wii であることによりその韻母が前舌母音を有していたことが確認されるから、この漢語は現代北京語と同じく撮口介音として [y] をすでに有していた可能性が高い。

⑪は [hw] のような音を表したのではなく、⑩の {w} と対を成す高子音の /w/ である。来文の漢語音表記としての {hw} の用例は {w} と比べてずっと少なく、表に掲げた二例がその全てである²¹。

²⁰ 西南官話雲南片の滇中小片、滇南小片(石屏県を除く)は撮口呼を欠く(銭2010: 257-258)。

²¹ 但し、この二例の他に、“恩”を hwään と表記した例がある。“恩”は本資料では通常 hngään と表記される(3.1.4.2参照)。hwään の例は、{w} と {ng} の字形が類似しているための書き誤りであろう。

3. 1. 2. 舌音類

八百字	漢語音	古声母	例字
① t	t	端, 定仄	tai 大帶待戴, töö 得, tuu 都度
② th	th	透, 定平	thaa 他, thääw 条, thuu 頭
③ d	t	端	dai 歹, dau 倒, ding 頂
④ dh	th	透, 定平	dhau 討, dhuuk 途土, dhung 通同
⑤ D	l	来	Dai 来 (この例のみ)
⑥ n	n	泥	naam 南, nään 年, nuuy 内
⑦ l	l	来	lâ 羅, liiw 留, luuk 路
⑧ hl	l	来	hlâ 楽 (この例のみ)
⑨ r	l	来	raang 両 (この例のみ)

3.1.2.1. ① {t}(H) と③ {d}(L)。いずれも端母または定母仄声に対応し、漢語音の /t/ を表記したと解釈できる。

3.1.2.2. ① {th}(H) と③ {dh}(L)。いずれも透母または定母平声に対応し、漢語音の /th/ を表記したと解釈できる。

3.1.2.3. ⑤ {D}(H)。漢語音表記としては“来”の異表記として現れるのみ(“来”は lai と表記された例が圧倒的に多い)であるが、八百語の表記には多用される字母であり、雑字においては来母、端(及び端仄声)母、泥母の三類の漢字で音訳され、来母字に訳された場合が比較的多い²²。三類に音訳し分ける条件は発見できない。この現象は、これらの音訳例において、八百語の /l/, /t/, /n/ 等の異なった音素がみな八百文字 {d} によって表記されたと考えるよりは、{d} で表記されるある一つの子音音素に該当する音声(漢字音訳を行った者によって /l/, /t/, /n/ 等の異なった声母に聴取され、引き当てられた結果である)と考えるべきであろう。一つの子音が三通りに引き当てられるのは、この音訳対象が音訳者にとってそれだけ聴取の難しい子音であることの反映であると解し得る。来文の八百文字表記漢語において {d} の表記例が“来”の僅か一例であるのも、漢語側にこれに類似する声母がないことを裏書きする。西田(2001a)の音価 ?d は、そのような子音としてふさわしいものであろう。

3.1.2.4. ⑥ {n}(L)。来文の音訳例は全て泥母字である。漢語音 /n/ を表記したと解釈できる。

低子音 {n} に対する高子音 {hn} は、来文の八百文字表記漢語には使用されていないが、八百語としては多くの例がある。雑字の音訳漢字では、{n} と {hn} はともに

²² 用例の内訳(異なり字数)は、来母15字、端母と定(仄)5字、泥母2字である。

泥母字で音訳されている。

3.1.2.5. ⑦ ㄓ(L)、⑧ ㄒ(H)、⑨ r(L)。漢語の来母字はほとんどが⑦ {l} で表記されるが、“楽”に {hl} が、“両”に {r} が用いられる。このほか、既に触れたように“来”に {D} が用いられる。

{r} の用例の“両”は、『百夷館来文』の漢字音表記でも rang となっている。百夷語自身でも“両”を rūang と言う（『百夷館訳語』雑字・数目門「両」「隴」rūang）ので、百夷館来文の r- 表記は百夷語の綴りが影響したと考えられるが、八百館雑字に「両」の項目がないため、百夷語 rūang と同源の語が八百語にも存在したかどうかはわからない。

雑字に見られる八百語の表記においては、{hl}, {r} の使用頻度も {l} に劣らず高く、来文の漢語音表記には見られない {hr} も見られる。雑字では、八百語の l, hl, r, hr は全て来母字で表記されている。一方、来文において漢語の来母字は、上述の如くほとんど {l} で表記される。この非対称性は、八百語の声母の中で {l} の音声は漢語の来母の音声と最も近いことを表す。

“楽”に用いられた {hl} の八百語としての音声が無声の [l] であるか有聲の [l̥] であるかには不透明な点があるが、分節音としての性質はともかくとして、“楽”字の声調が、八百語の {hl} がとる「高」音類の声調のいずれかと類似していたために、音訳者によってわざわざ {hl} が選択された可能性がある (cf: 3.1.1.4, {hm} の表記例)。

3. 1. 3. 齒/硬口蓋音類

八百字	漢語音	古声母	例字
① c	tʃ	知, 章, 澄仄	cii 知枝之只旨隻, cuu 主住鑄竹
	k	見	caa 嘉
② ch	tʃh	徹, 昌, 澄平, 崇平, 禪平	chaang 常床, chau 朝, chuu 処
	tʃh	精	chääk 雀
③ j	tʃ	知, 章, 澄仄	jaang 張漲掌帳, jääng 重, juun 准
	tʃh	初	jai 差
	k	見	jä 角, jaang 降
④ s	s	心, 邪	saan 三, saang 象, sääng 送
	ʃ	生, 崇仄	suu 数, säng 生, sii 事
		書, 禪仄	sää 赦, sau 烧, sii 是
	ts	精, 從仄	sä 就作做奏, saang 将, sin 進尽
	tʃh	清	sään 千, sääng 青, sii 次
x	曉, 匣	saa 下, see 靴	

⑤ z	s	心	zääw 小, zī 死, zuuy 歲
	š	書	zuu 守手, zuuy 水
	ts	精, 從仄	zī 紫子, zuuy 罪醉, zun 祖
	tsh	清, 從平	zaay 綵, ziing 曾, zään 前
	tsh	澄平, 禪平	zīn 陳臣
初		zuy 差	
⑥ ñ	∅	云, 以	ñään 員遠, ñuun 蓉, ñuung 永
		疑	ñaa 牙衙
	ř	日	ñun~ñuun 絨
⑦ y	∅	影, 云, 以	yâ 約, yään 筵滄沿, yuu' 油有又
		疑	yang 仰, yin 銀
	ř	日	yau 擾, yin 人, yuu 如

* 声母例外字及び古声母不明字

② chaan 産 (生母) ; chii 喫 (溪母)

③ jüaa 搗

3.1.3.1. ① {c} と ③ {j}。いずれも、知、章、澄仄の各声母に対応する (初母“差” : {j} の対応例については、3.1.3.3で触れる)。雑字で {c} {j} の表記に用いられた音訳漢字の声母も知、章/莊、澄仄、崇仄の各声母である (例外として、紬澄母平声と暫從母去声がある)。西田 (2001a) の音価は {c} が [tɕ]、{j} が [dʒ] であるが、この音価は「表音漢字から復元した」(西田 (2001a : 742)、表1の注) ものであり、今これを再び漢語の音価推定に用いるわけにはいかない。後に触れるように (3.1.3.3)、タイ諸語の齒擦音は調音点が一列で、理論上様々な調音的 variant を許すものであるから、結論を言えば、両字母の対音状況は漢語音 (特に調音点) の再構にはあまり寄与しない。むしろ漢字が、八百語としての {c} {j} の音声がある種のシュー音破擦音であることの証拠になる。表の漢語音の欄には、暫定的に、/tɕ/ を置く。

来文における {c} と {j} には、少数ながら、見母二等字“嘉”“降”の表記例がある。更に、④ {s} にも曉母三等字“靴”、匣母二等字“下”の表記例がある。雑字においては、「獻」sīan (人事門、494) を“県” (匣母四等) で表記した例がある²³。八百館訳語 (来文・雑字とも) の漢語音においては、後 (3.1.3.4) に述べる {ñ}、{y} の対音状況から見て、

²³ 雑字の「獻」の項は「謝」「恩」「朝」に続く位置にあり (泉井 (1953 : 34))、この三項の八百語対訳は全て、漢語からの借用語である。「獻」も同様に漢語からの借用語であると考えられる。借用段階における“獻” (曉母三等字) と s- の対応がすでにここで議論するのと同じ問題を含んでいるが、ここで注目するのは、音節 sīan を“県”で音訳している部分である。

牙喉音二等字にはすでに -i- 介音が発生していたと見られるから、以上は漢語の -i- 介音の前の牙喉音声母と八百文字の齒擦音字母の対音関係と見ることができる。

一般にタイ諸語は -i- 介音を欠く²⁴ため、漢語の [kia] や [kian] のような音を八百語の音韻体系に置き換える際に、-i- 介音が無視される可能性がある。『百夷館來文』に見える百夷文字表記漢語にも、加家 kaa、降 kang、下 haa、調 taw など、漢語側に当然想定される -i- の要素が書かれない例が見られる²⁵。百夷文字にはビルマ文字から継承した介子音 -i- があり、{kiaa}、{kian} 等の綴り字は理論上は可能であるが、百夷語の音節としてそれが存在しないため、-i- が用いられなかったのであろう。八百文字表記漢語の“嘉降靴下”などに介音にあたる音声が発見できないのも八百語の音節構造が原因であると見られる。但し、ここで問題なのは、牙喉音系ではなく齒/硬口蓋音類の声母が用いられていることである。声母の表記が {c} {j} {s} である以上、これらの字の声母は軟口蓋音ではなく、何らかの「口蓋化」を蒙っていたと解釈するしかない。即ち、官話方言においてその後展開する尖音と団音の合一の前兆が現れていると見られる。但し、

- 1) 見・曉組細音字全体では、{k} {g} {h} 表記（後述3.1.4参照）の例の方がずっと多い、
- 2) 精組細音の破擦音（<精清従の各母）は {c} {j} ではなく {s} {z} で表記されるので、“嘉角降”との間に依然として表記上の差異がある、

の二点の理由で、本資料で八百文字表記された漢語において、尖音と団音はまだ合一していない、としなければならない。本資料の漢語音は、次のようであったと推測される：

- 1) 見・曉組細音字の一部または全部が前舌面を用いて調音され、[c, ch, ç] か、場合によっては [tɕ, tɕh, ɕ] に近く響き、これが八百文字 {c} {j} {s} を以て表音された（音素としてはなお軟口蓋音系列であると見て、表の漢語音欄には /k/x/ を記してある）；
- 2) 精組細音字は依然として舌尖前音であり、[ts, tsh, s] と発音されていた。

3.1.3.2. ② {ch} (H)。{ch} は八百語表記にはあまり多く使われない字母であり、雑字では4つの単語に用いられるに過ぎない。{c} の有気音として /tʃh/ を推定する。

3.1.3.3. ④ {s} (H) と⑤ {z} (L)。{s} と {z} は来文の漢語音表記に際立って多く用いられる。なおかつ、最も多様な漢語声母と対応する字母で、精組の全ての声母（精清

²⁴ 「獻」に見える siân は、私見では [sian] ではなく [si:ɛn] のような音を想定すべきで、ここにおいて [i] は介音ではなく、二重母音 [i:ɛ] の音節主音に該当する。なお、二重母音 [i:ɛ] について、3.2.3.3、3.2.4.4 参照。

²⁵ 更科（近刊）参照。なお百夷館來文が表記した漢語音においても、二等牙喉音字には -i- 介音は発生していたと考えられる。“牙衙”yaa、“崖”yay など、疑母二等字：{y} の対応が見られるからである。

従心邪)、莊組の初生崇(仄)、及び章/知組の澄(平)禪(平)書禪(仄)を包括する。しかし、この二つの字母の八百語としての音価が /s/ であることは、雑字の側でこの二字母の表記に用いられた音訳漢字のほとんどが心/邪母であることによって判明する。ここに音訳漢字を全て挙げる。

{s} : 【心母】 思蘇三孫桑瑣掃四細素賽線算信送撒塞索速散喪 ; 【邪母】 尋謝習 ; 【心/邪母以外】 紗色以上生母 ; 梟以上匣母

{z} : 【心母】 思腮僧掃箏賽塞

タイ諸語の歯擦音 (sibilants) は一般に一列であり、調音点の対立を持たない。例えば Li(1977) の共通タイ語の声母体系では、*s-, *z-, *ç-, *čh-, *j- の五つの歯擦音が再構されているが、この五つは有声/無声/気音、及び阻碍の様式によって区別されており、歯擦音内で調音点の違いのみによって子音の区別がなされることはない。Li(1977: 4) の現代タイ諸語の描写では、シャム語には palatal の č, čh と dental の s があり、破擦音と閉鎖音とで調音点がずれているが、歯擦音は調音点的に一列である。同じく Li(1977:13) の龍州方言では、歯擦音は全て palatal²⁶で č, čh, š であるが、他に lateral fricative の ʃ(更科注:即ち [ɸ])がある。Li(1977)の語彙比較によって見ると、共通タイ語の *s-, *z- に対応する龍州の声母はむしろ ʃ であって、š- は共通タイ語の *čh- が摩擦音化して成立したものの如くである。龍州の状況は、破擦音が palatal で摩擦音が dental というシャム語の状況と一脈通じている。Li (1977: 16) の剥隘方言の歯擦音音素は共時的には龍州と同じで、palatal の č, čh, š と lateral fricative の ʃ であるが、č は *k-, *kh-, *g- など軟口蓋破裂音が前舌母音と共に起した場合に口蓋化を起こした結果であり、*ç-, *čh-, *j- は š- となり、*s-, *z- は ʃ- となっている。中国の僚語の歯擦音について言えば、芒市は ts, s の二つで i, e, ε の前で [tɕ, ɕ] と読まれる; 景洪も同様に ts, s の二つで i, e, ε の前で [tɕ, ɕ] と読まれる (周・羅 (2001))。

八百語の場合、3.1.3.1に述べたように、{c} と {j} の音声は何らかのシュー音破擦音でなければならず ({ch} はその有気音)、一方 {s} の音声はスー音の [s] であったと考えられる。同様の状況は『百夷館訳語』の音訳漢字にも見られ²⁷、李方桂氏が報告するシャム語の状況とも一致している。

従って、来文の漢語音表記に用いられた {s}{z} のうち、漢語音に dental の破擦音が想定される精・清・従母字、及び palatal (ないし alveolo-palatal) の摩擦音が想定される生・崇(仄)・書・禪(仄)母字は、八百語側に相当する音声がなく、{s}, {z}

²⁶ 李 (1940) では、龍州のこの三子音は tɕ, tɕ', ɕ と表記され、「稍微有點軟化(約帶舌面)的 ts, s: 像廣州早細的聲母」(李 (1940: 3)) であると述べられている。

²⁷ 更科 (近刊) 参照。

を以て近似的表記がなされていることになる。

{s}{z} には、palatal ないし alveolo-palatal の有気破擦音が想定される初・澄（平）・禪（平）母の表記例が少数ある。また、{j} に初母字“差”の表記例があり、{g} には溪・群（平）母字“顛孔求”の表記例がある（3.1.4の表参照）。更に、雑字の音訳漢字には、「喜」（420）böŋ cai“彭寨”（ベルリン本）の例があり、{b} に並母平声の“彭”が対応している²⁸。以上においては、有声音字母が漢語の有気音と対応している。

泉井（1953：98-103）の音韻対応によれば、共通タイ語の有声閉鎖（破擦）音が有気音化するのは、シャム語やラオ語などである。西田（2001a：742）はまさに上記 böŋ cai の b-：彭の対応を取り上げて、b の「無声出気音化が始まっていたのかもしれない」と述べている。このように、八百語において、少数ながら、有声閉鎖（破擦）音の有気音化が観察されることは注意を要する。{z}：“陳臣差”の対応も、有声音字母の有気音化と関係づけられるかもしれない。但し {z} は破擦音ではなく摩擦音であるのが八百館訳語（雑字・来文）における通例であるから、例外的対応である点に変わりはない。

3.1.3.4. ⑥ {ŋ}(L)、⑦ {y}(L)。{ŋ} は雑字において“紐”“吝”などの音訳漢字との対応が少数見られるので、八百語としては硬口蓋鼻音を保持した語もあった如くであるが、来文の漢語音表記の対音状況は {y} との間に違いがない。{ŋ}{y} はともにゼロ声母細音字の表記に用いられた如くである。それを踏まえた上で {ŋ}：“牙衙”（いずれも疑母二等）の対応を検討すると、ここで {ŋ} は疑母の鼻音性の残存ではなくゼロ声母化した様相を反映していると考えられ、また漢語音における牙喉音二等字の -i- 介音発生も確かめられる。

両字母には日母字の表記例がある。八百語には [z] のような子音が存在しないため、{ŋ}{y} 表記が当てられたと解釈できる。漢語音欄の ĩ 表記は、/s/ と同じ調音点の有声接近音を象徴したものである。

3. 1. 4. 牙喉音類

八百字	漢語音	古声母	例字
① k	k	見, 群仄	kau 高告, kii 給極, kung 貢
② kh	kh	溪	khää 闕, khii 起器去乞, khǎw 叩
③ g	k	見, 群仄	gaan 敢感, gääw 繳, giing 景
	kh	溪, 群平	gǎ 顛, gǎǎŋ 孔, giww 求
④ gr	kh	溪	grǎ 可, gruu 苦

²⁸ 但し同一語は、「雑字」の他の2箇所（741, 753）では“崩寨”に作る。“崩”は幫母字。

⑤ ng	ŋ	疑	ngã 我（この一例のみ）
⑥ hng	ŋ	影	hngään 恩（この一例のみ）
⑦ χ	x	曉, 匣	χũaa 花, χã 河合, χuuy 会
⑧ γ	x	曉, 匣	γã 火, γii 喜, γuuy 回毀
⑨ h	x	曉, 匣	hii 係, hiin 欣, huu 護忽
⑩ ’	∅	影, 以	’aan 阿安鞍, ’ii 衣依夷以已一益亦馭, ’in 印
		日	’ii 二

3.1.4.1. ① {k}(H)、② {kh}(H)、③ {g}(L)、④ {gr}(L)。漢語音との対応上、次の二群に分かれる。

/k/ 群（見母、群（仄）母と対応）：① {k}；③ {g} の大部分

/kh/ 群（溪母、群（平）母と対応）：② {kh}；③ {g} の一部；④ {gr}

{g} が /k/ のほか /kh/ と対応するのは、八百語における {g} の有気音化と関連がある可能性がある（3.1.3.3参照）。{gr} が /kh/ と対応するのは、{br} が /ph/ と対応するのと平行している（3.1.1.2参照）。

3.1.4.2. ⑤ {ng}(L) と⑥ {hng}(H)。来文において、{ng} が声母として用いられた字は“我”（疑母上声）一字のみで、{hng} が用いられたのは“恩”（影母平声）一字のみである。3.1.1.6に述べた通り、疑母字はこの“我”を除きすでにゼロ声母化しているが、疑母でない“恩”に却って {hng} が用いられているのは、疑母に必ずしも由来しない /ŋ/ 声母が発達して少数の字に現れた段階を表している。

3.1.4.3. ⑦ {χ}(H)、⑧ {γ}(L)、⑨ {h}(H)。いずれも、漢語の曉、匣母に対応する。これらの漢語音には喉音 /h/ を立ててもよいが、{χ}{γ} との対応例の方が {h} との対応例よりも多い²⁹点に鑑みて、軟口蓋摩擦音 /x/ を推定した。

3.1.4.4. ⑩ {’}(H)。影・以母の開口字と対応するほか、日母の“二”の表記に用いられている。いずれも、漢語音にはゼロ声母を推定する。“二”がゼロ声母を取るのは『司馬温公等韻図経』（陸（1946/1988：58））などにも見られ、『百夷館訳語』来文の漢語音表記にも見られる³⁰。

なお、声母の例外として、’ii“例”（来母字）がある。“例”は期待通り lii と書かれた例もあるので、’ii は誤記と考えられる。

3. 1. 5. 八百文字の音類と漢語声調との関係

²⁹ 来文における各字母の対応例の数は3.1.5の表を参照。雑字における対応例の数は、χが15、γが12、hが11である。

³⁰ 更科（近刊）参照。

八百文字の「高子音」と「低子音」の区別と、漢語の調類との関係について、統計を示す(対音に不審な点があって誤記であると思われるものは、統計から除いてある)。表には、来文に出現した八百文字表記漢字を、声母の表記に用いられた八百文字字母(左半分に高子音、右半分に対応する低子音を配す)とその漢字の調類とによって分類し、各セルには該当する漢字の異なり字数を示した。空白のセルは、データ中に該当する字がないことを示す。左右の表の行の片側全体が空白になっているところは、高/低子音に対応する低/高子音が理論的に存在していない、あるいは理論的には存在するが来文の漢語音表記としては例が見られないことを示す。調類の分類は、次の枠組に従う：

陰(陰平)：中古の清平声字

陽(陽平)：中古の次濁平声・全濁平声字

上(上声)：中古の清上声・次濁上声字

去(去声)：中古の全濁上声・清去声・次濁去声・全濁去声字

入(入声)：中古の全ての入声字

不明：中古音の調類が不明である字。“阿”、“們”の二字のみ。他に“歹”があるが、現代音を参考にして上声に分類した。

高子音								低子音							
	陰	陽	上	去	入	不明	計		陰	陽	上	去	入	不明	計
p	1			9	4		14	b			6				6
ph		1			2		3	br		3					3
B				1	1		2								
hm				1	1		2	m		5	3	1		1	10
f	2	3		5	2		12	v	1		3		1		5
hw				2			2	w		7	3	4	3		17
t	3			12	2		17	d			3				3
th	2	2		2			6	dh	1	2	2				5
D		1					1								
								n		4	1	1	1		7
hl				1			1	l		8	4	2	1		15
								r			1				1
c	3		3	2	2		10	j	2		3	3	1		9
ch	2	3	1	1	3		10								

s	22	1	5	25	7		60	z	1	6	10	3	1		21
								ñ		5	2				7
								y	1	6	4	4	1		16
k	14			10	2		26	g			8	1			9
kh			1	5	2		8	g		1	2				3
								gr			2				2
hng	1						1	ng			1				1
χ	1	1		2	1		5	γ	1	6	4				11
h	1			3	1		5								
'	4	1	2	3	4	1	15								
計	56	13	12	84	34	1	200	計	7	53	62	19	9	1	151

表全体に顕著に現れた傾向として、

- 1) 高子音字は陰平類と去声類（特に去声類）の漢字の表記に多く用いられる。
- 2) 低子音字は陽平類と上声類（特に上声類）の漢字の表記に多く用いられる。

の二点が指摘できる。

同様にして、雑字部分における八百語字母と音訳漢字の調類の関係を調べてみると次のようになる。但し紙幅の都合により、高子音・低子音それぞれの表記に用いられた音訳漢字の合計の数値の調類ごとの内訳のみを示す。

高子音							低子音								
	陰	陽	上	去	入	不明	計		陰	陽	上	去	入	不明	計
計	43	27	27	113	62	12	284	計	24	42	81	18	40	6	211

雑字の場合は、調査対象が音訳漢字で字義や文脈が存在しないため、ある漢字が二つ以上の調類を持っている場合（例えば“転”、“倒”など）にその調類を確定することができず、結果として調類不明の扱いとしたものが来文の場合よりも増えている。それでも大筋において、来文の場合と同様、高子音字を声母とする音節には去声と陰平が用いられやすく、同じく低子音字を声母とする音節には陽平と上声が用いられやすいと言い得る。但し雑字の音訳漢字の場合、入声字の使用も少なくない点が来文とは異なる。

前にも述べたように、そもそもシャム語・ラオ語・タイ＝ルー語などの文字の高子音と低子音の区別は、子音の歴史的な無声・有声の別が、これらタイ諸語の声調体系における陰陽調分裂によって調類の区別と対応するようになったことから生じたも

のであるゆえ、漢語音の声調調類と高子音・低子音の別とが一定の対応を示すことは自然である。但し『八百館来文』においては、その区別が、中古漢語の清濁の別ではなく、近代北方語的な四声の体系と対応することが、この表によって確かめられる。

八百館が設置された1511年と同時期の16世紀初期に朝鮮で編纂された漢語会話教科書『翻訳老乞大』のハングル音注には、朝鮮語の高低アクセント表示を流用した声点がつけられており、この資料が記録した16世紀の官話系漢語の調値を推定することができる。下に示すのは遠藤（1984：168）による推定調値である（入声を除く）：

陰平 45 陽平 214 上声 11 去声 55

この調値を『八百館来文』の対音状況にあてはめた場合、

高子音字：45調、55調

低子音字：214調、11調

となり、八百文字の高子音字/低子音字が、実際に高い調値/低い調値の漢語声調と親和性を有していたという興味深い結論になる。更に、すでに述べた {hm}：目や {hl}：楽の表記例から、本資料の漢語の次濁入声字の少なくとも一部が高い調値（去声？）を有していた可能性も示唆される。

3. 2. 韻母の状況

韻母の状況の記述に当たっては、該当する用例を全て列挙して、この資料の全貌が把握できるようにした。

3. 2. 1. 韻尾ゼロ

3.2.1.1. {aa}：/a, ia, ua/

I 'aa 阿, baa 把, maa 馬, thaa 他, caa 嘉, jūaa 擣, saa 紗下, ñaa 牙衙, χūaa 花

II paa 八, faa 発, naa 納

附：{aa'}：faa' 法

Iは仮撰二等開口/合口字で、IIは山撰もしくは咸撰の入声字である。近代漢語の諸対音資料や現代北方漢語諸方言の状況から、漢語主母音 /a/ を推定する。この推定音は、八百語音としての {a} の音価とも矛盾しない。

声母の検討（3.1.3.4）において述べたように、“牙衙” ñaa の {ñ} はゼロ声母下の /i/ 介音を表し、二等牙喉音声母字における -i- 介音の発生を表している。“嘉” caa と “下” saa においては -i- 介音が表記されず、代わりに声母が口蓋化しているが、漢語側に -i- 介音自体は存在したはずである。ただ、八百語として、「子音 + i + aa」という音連続が存在しないため、反映されなかったと解釈する。同じ状況は百夷館来文の漢語音表記にも見られる³¹。

³¹ 更科（近刊）参照。

“法” faa’ において {’} と転写した八百文字の符号は、雑字における八百語詞の表記に盛んに用いられ、その用法は多岐にわたっている。いま、泉井 (1953) の記述に従い、その字母表31番の「声調表示符号」に同定しておく。この符号は「シャム語の第二声調符号 (mai2 tō) にあたる場合が多い」が「逆にシャム語の第二声調符号をもつ語が必ずしも (31) の符号を持つ八百語の語詞に対応しない。八百語においては、これに対して無表記の語詞が当たる場合がふつうである」(泉井 (1953: 12)) とされ、その使用はかなり随意的・散発的であるように見える。来文の漢語音表記では、他に yuu’ 油有又、klai’ 該に現れるのみである。yuu’, klai’ はこの音節綴りのまま雑字に現れ (音訳漢字はそれぞれ“育”“該”)、vaa’ についても、類似した faa’ が雑字に見える (音訳漢字は“法”) ことから、来文に現れる {’} は、漢語の声調やその他の要素を積極的に表記しようとしたものではなく、雑字における八百文字音節綴りと音訳漢字との対応関係を参照する (あるいは参考にする) 過程で混入したものにすぎないと考えられる。

3.2.1.2. {ə} : /o, io/

I lǎ 羅, kǎ 箇, grǎ 可, γǎ 河合, ngǎ 我以上開口; sǎ 做, gǎ 顆, γǎ 火以上合口

II hlǎ 樂, jǎ 着角, sǎ 索₁作, zǎ 索₂, yǎ 約

III nǎ 奴₂

IV sǎ 就奏

I は果撰一等の開/合口字で、開口と合口の区別は表記上存在しない。また、次項 (3.2.1.3) 参照。

II は宕江撰一二等開口の入声字である。jǎ 着角は {a} の項に述べたのと同じ理由により、-i- 介音が表記されていない。

III は“奴婢”という常用語に現れるが、不規則な母音表記である。

IV は、流撰字である。“就”は三等であるが、他の流撰三等字の多くは {iɪw} と表記されており、例外となる。現代方言において、“就”の i 介音が脱落し [tsou] のように読まれるものがあり、例えば西安や武漢がそうである (北大中文系 (1989: 215))。本例も、あるいはそのような口語的発音を記したものかもしれない。

IV の“奏”は一等字である。八百館来文における流撰一等字の表記は極めて不安定であり、他の例をすべて挙げる³²と次のようである：

liiw 楼; thuu 頭; huuw~hīuu 厚; hīǎw 叩

こうした多様な表記は、漢語の流撰一等の韻母の音声が、八百語の音韻体系によって

³² 但し、現代官話諸方言でも u 韻母を取る“母”muu を除く。

は非常に捉えにくいものだったことを物語っている。一方、雑字部分の音訳漢字においても、流撰一等字は“母”を除いて使われておらず、八百語の韻母に漢語の流撰一等に近いものがないことを裏付ける。“奏”の例は sã で [tsou] を写そうとしたものであろう。

3.2.1.3. {oo} : /o/

koo 過

果撰一等合口字。すでに (3.2.1.2) 述べたように、この類の韻母は他では {ã} で表記され、開口字と区別がない。雑字の音訳漢字においても果撰一等の開合の区別は見つけることができず、例えば八百語の韻母 ã の音訳に“賀羅”のような開口字と“果火”のような合口字を無差別に用いている (例省略)。本例の“過”も、雑字では kããk 音節の表記に用いられている: 「擘」(543)、“過” kããk。本例の {oo} 韻は、現段階では、積極的に果撰一等の合口性を表したものではないと解釈しておく。

3.2.1.4. {öö} : /ɤ/

töö 得

“得”は曾撰一等入声。ö は非円唇の mid vowel で、[ɤ] のような音声であったと考えられる。雑字には、漢語“国”をそのまま借用した語 (音訳漢字も“国”) が見られるが、八百文字は kүүö と綴られている。以上二つが、漢語音表記に {öö} が用いられた例の全てである。但し、{ök} が“白百” (いずれも梗撰二等入声) の表記に用いられている。この事実は、曾梗撰一二等字の主母音が前舌母音ではなく、中舌～奥舌母音であったことを示すものである。

3.2.1.5. {ää} : /ie/

I sää 赦

II sää 設, khää 闕, wää 月

I は仮撰三等開口、II は山撰三等入声字開/合口字。これらに {ö} ではなく {ä} が用いられたことから、これらの字の主母音が [e] のような前舌母音であったことがわかる。漢語の介音の表記は基本的になされず、ただゼロ声母である場合に限ってその介音が子音字母として表現される。“月”がその例である (“月”は疑母字であるが、[ŋ] の音はすでに脱落しゼロ声母化していた。3.1.1.6参照) が、八百語には前舌円唇母音 [y] が存在しないため、{w} で表現されている。

3.2.1.6. {ee} : /ie/

see 謝靴

仮撰三等開口と果撰三等合口。前記 {ää} との書き分けの条件は不明である。雑字の音訳漢字においても、八百語の {ää} 韻と {ee} 韻の表記には仮撰三等字と山撰三

(四) 等入声字（及び咸攝三四等入声字）が用いられる³³。ただ、{ee} の表記には蟹撰四等の“米”“細”も見られることから、{ee}の方が幾分狭い母音だったと考えられる。

3.2.1.7. {ī} : I /i/[ɿ] ; II /īr/[əɿ]

I s̄ī 四自字次賜, z̄ī 死紫子此

II 'ī 二

I は止撰三等開口の精組字で、{ī}によって舌尖母音 [ɿ] を表記したと見てよい。

II は止撰三等開口の日母字で、現代北京などでは [əɿ] 韻になっている。本資料では、日母は通常 {y} または {ñ} で表記されており (3.1.3.4)、本例のみが {'} であることから、本例“二”が漢語音としてもゼロ声母であったと解釈される。百夷館訳語の来文でも、“二”が 'öw と表記されている。

3.2.1.8. {ii} : I, III /i/(または /i/[ɿ]?) ; II /uəi/ ; IV /y/

I pii 婢被備, bii 比, phii 皮, tii 帝地遞, th̄ii 替, lii 裏礼例¹, khii 起器, yii 喜, hii 係, cii 之知枝只旨, sii 西犀齋時使是事, 'ii 衣依夷以已例。

II hwii 慰, wii 尾

III phii 疋匹, tii 的, lii 立, kii 給極, khii 乞, cii 隻, chii 勅喫赤, sii 湿十石, 'ii 一益亦駅

IV khii 去, wii 与, k̄ii 居

I は止撰開口三等字、蟹撰開口三四等字を含む。これらの漢語音には /i/[i] が推定される。知章莊組のものは、漢語としては舌尖母音 [ɿ] であった可能性があり、八百文字で [i] と [ɿ] が区別できないために両者が共に {ii} で書かれたと考え得る。

II は止撰合口三等字で、{uuy} 韻でも表記されている。

III は深臻曾撰開口三等及び梗撰三四等の入声字を含む。これらの漢語音にも [i] が推定でき、知章組の字は I と同じく漢語音としては舌尖母音 [ɿ] であった可能性がある。

IV は遇撰三等合口字である。八百語には [y] の母音がないため、{ii} で表記されているが、“去”を除き合口要素が {w}({ü}を含む) で表記されているので、漢語音は [y] であったと考えられる。{iuu} と綴られていないことから、その [iu] でないことが裏付けられる。

3.2.1.9. {uu} : I, II /u/ ; III /əu/

I puu 布部, muu 母, fuu 夫芙符父付赴副, vuu 撫府, tuu 都度, nuu 奴, cuu 主住鏞,

³³ 全て開口字である。八百語に円唇前舌高母音 [y] がないためである。

chuu 処, suu 酥書数, gruu 苦, huu 護, wuu 無五悞, yuu 如

II buu 不₁, hmuu 目, fuu 服, cuu 竹, suu 束, huu 忽, wuu 屋物

III th₂uu 頭, zuu 守手

I は遇撰の一等字（軽唇音と知章莊組字では三等。“母”は例外字で流撰一等）で、その漢語音は /u/[u] であったと推定できる。遇撰の知章莊組字は、『司馬溫公等韻図経』では u 類が属する祝撰第五独韻篇ではなく y 類が属する止撰第四合口篇に属し、それゆえに陸志韋氏は、『西儒耳目資』の“u 中”という処理も参考にしながら、この類の韻母に対して u ではなく u という再構音を与えている（陸1988:59）。八百文字では、前項3.2.1.8に見たように、“与”や“居”を {ii} で表記しているから、この類の韻母を uu で表記したことは、その漢語音が [y] ではないことを証する。それは現代北京と同じく [u] であるか、場合によっては陸志韋氏の推定音価の [u] か、舌尖円唇母音の [u] であったかもしないが、いずれにせよ、八百語の話し手にとって、自らの /i/ ではなく /u/ に聞こえた音であったことは確かである。

II は臻撰一/三等及び通撰一/三等のいずれも入声字。I と同じ /u/ を推定する。

III は流撰一/三等字である。3.2.1.2に述べたように、流撰一等の韻母は a̱, iiw, iuu, iāw などとも書かれ、一方流撰三等の韻母は多く iiw と書かれる。一等“頭”の uu 表記は [əu] のような音を表記したものであろう。三等“守手”が ziiw ではなく zuu と書かれているのは、これらの声母が既に反り舌音となっていて、-i- 介音が消失した段階を示したのものかもしれない。しかし一方で、書母字“収”は siiw と表記され(3.2.3.4 参照)、-i- 介音が保持された段階を反映している。

附：{uu'} : /iəu/

yuu' 油有又

流撰三等字。

附₂：{iuu} : /iəu/?

hiuu 厚₁

流撰一等字。雑字には {-i-} + {uu} という綴り字は出現しない。流撰一等字の表記に介子音 {-i-} が用いられたものとしては、他に iāw 韻が“叩”に用いられた例(3.2.3.3 参照)がある。{-i-} が用いられた理由は不明である。

3. 2. 2. -i 韻尾

3.2.2.1. {ai}、{aay} : /ai/

{ai} : brai 牌, mai 買, hmai 売, tai 大帯待戴, dai 歹, Dai 来2, lai 来1, jai 差1, sai 再在, zai 纜, χai 害, hai 塊

附：{ai'} : klai' 該

{aay} : th₁aay 太, zaay 綵

{ai, ai', aay} で表記された字は全て蟹摂開口一二等であり、その漢語音は全て [ai] であったと考えられる。{ai} が用いられた場合が圧倒的に多い。

3.2.2.2. {ũây}

kũây 具

{ũây} は雑字の八百語音表記としては

「椀」(315) 台 thũây cf: 共通タイ語 *thuaiC1 “cup, bowl” (Li(1977 : 295))

「瓢」(323) 卑 bũây

「差発」(793) 賽(招) sũây (jau) cf: 共通タイ語 *suoi “tax” (Li(1977 : 296))

に用いられ、音訳漢字やタイ諸語の音形式から見て、[u:ai] のような韻母が推定されるが、これが“具”(遇摂三等)の表音に用いられたとすると音がかけ離れる。誤記でなければ、[ky] 音を [küei] のような音節に受け止めてこのように表記したのかもしれない。

3.2.2.3. {uuy}, {uy} : /uəi/

{uuy} : bruuy 陪, γuuy 回毀, nuuy 内, wuuy 囿位為, χuuy 会, zuuy 歳水罪醉

止蟹三等及び蟹摂一等の合口字。漢語音としては [uəi] を推定する。うち“内”nuuy は、『司馬温公等韻図経』ではすでに開口化し、墨摂第八開口篇に入っている(陸(1946/1988 : 62))。

{uy} : zuy 差

{uy} はこの一字だけで、しかも“差”の字音と合わない。また、“差”は普通 jai と表記される。よってこの例は誤記であると考えられる。

3. 2. 3. -u 韻尾

3.2.3.1. {au}, {aaw} : /au/

{au} :

I bau 保宝飽, Bau 帽, mau 毛, tau 到道, dau 倒, dhau 討, lau 老, sau 早, kau 高告;

II jau 照, chau 朝, sau 烧少, yau 要擾;

III Bau 不

I は効摂一二等字、II は効摂三等字である。

III は不規則対音。否定副詞“不”にあたる八百語の単語が Bau であるため、これを直接表音に用いたと考えられる。“不”には buu 表記もあって、buu の方が真の表音であると言える。

{aaw} : naaw 腦

aaw 韻はこの一字(効摂一等字)のみである。{aaw} は {au} と等価であると考え

てよい。{aay} と {ai} の場合と平行して、{au} の表記例が圧倒的に多い。

3.2.3.2. {äaw} : /iau/

th₁äaw 条, läaw 了, säaw~zäaw 小, kääw 交, gääw 繳, yäaw 暎

効撰三四等字、及び牙音二等字“交”を含む。これらの字は当然 i 介音を含んでいたと考えられ、八百文字の側には介子音 {i} が存在するにもかかわらず、実際には {i} が用いられていない。これは、3.2.1.1で述べたように、八百語として、「子音+i+aa」という音連続が存在しないためである。漢語の [iau] は、八百語の音韻を背景に持つ者によって、[ɛ:u] のような音として受け止められたと考えられる。ここにおいて、漢語の -i- 介音は、主母音の前舌性として受け止められている。なお、同じく効撰三等字でも、知章系では {äaw} ではなく {au} が用いられ (3.2.3.1のII参照)、-i- 介音が、主母音の前舌成分としてすら反映されていない。このことは、知章系の反り舌音化の反映であるかもしれない。

3.2.3.3. {iãw}

tĩãw 吊, khĩãw 叩

“吊”は効撰四等、“叩”は流撰一等。

効撰四等韻母は通常 {äaw} で表記され、本例は例外的である。一方、流撰一等韻母は、3.2.1.2に述べたように、様々な表記が取られている。

{iãw} は、雑字においては、流撰の一等ではなく三等字が、漢語から八百語への借用語として取り入れられた項での出現例がある。

「州」(069) 州 cĩãw (州：流撰三等章母尤韻)

「紬」(575) 列-紬 rää cĩãw (紬：流撰三等澄母尤韻)

{iãw} はまた、雑字の八百語固有語の表記において、しばしば、共通タイ語の *iau と対応し、音訳漢字はやはり流撰三等字である。

「独」(405) 僕柳 phuu Dĩãw 共通タイ³⁴*?diauA1、泰 diau1、西傣 deu1³⁵

「牙」(513) 休 xĩãw 共通タイ *xiauC1、泰 khiau3、西傣 xeu3

「青」(638) 嗅 xĩãw 共通タイ *xiauA1、泰 khiaul'、西傣 xeu1

(柳：流撰三等来母有韻；休：流撰三等曉母尤韻；流撰三等曉母有韻)

共通タイ語の *iau は、二重母音 ia + 音節末音 -u という構造で、音節の核は a ではなく i の方にある。Li(1977: 280) は、*iau の現代タイ諸語の対応形式に含まれる ia 等の二重母音の「アクセント (accent) は第一成分にある」という言い方をしている

³⁴ 共通タイ語形式は Li(1977) による。以下同じ。

³⁵ シャム語 (“泰”) とタイ=ルー語 (“西傣”) の形は邢 (1999) による。なお引用に当たり、原文で上付となっている調号の表示を通常の大きさにしている (注番号との混同を避けるため)。以下同じ。

が、ここでの accent は「音節主音性」と解すべきである。八百語の {iāw} もまさしくこのような、音節主音が i に来る複合韻母を表記したものであり、その発音は、[i:əu] ~ [i:əu]、あるいはタイ＝ルー語の如く第一成分と第二成分が融合し単母音化した [e:u] あたりであったと推測できる。このような音が、流撰三等字で音訳されたと考えられる。なお [e:u] は、来文において漢字音“吊”が tiāw と表記されたことを説明するのにやや都合がよい。

3.2.3.4. {iiw} : /iəu/

I giw 旧求, liiw 留, siiw 収

II liiw 楼

I は流撰三等で、漢語音としては /iəu/ を推定する。“収”は章組（書母）字であるが、中古音の段階で同じ声母・韻母を有する“手守”は zuu と表記され、-i- 介音の反映の有無が異なっている（3.2.1.9参照）。siiw は声母がまだ反り舌音化していない段階を想起させ、一方 zuu は現代北京語と同様声母が反り舌化し -i- 介音が脱落した後の段階を想起させる。八百文字による漢語音表記において、音韻史上異なる二段階が共存していたことになる。

II は流撰一等である。既述の通り、この漢語韻類の表記は安定しない。

3.2.3.5. {uuw} : /əu/[ou]

huuw 厚₂

流撰一等字。“厚”は3.2.1.9にも述べたように hīuu と綴られる。{īuu}、{uuw} とともに、八百文字として構造的には可能であるが、雑字における八百語表記には見当たらない綴りである。八百語に無い /əu/ の韻母を何とかして描き写そうとして生じた異例の綴りであろう。

3. 2. 4. -n 韻尾

3.2.4.1. {aan}、{an} : /an/, /uan/

{aan} :

I paan 伴辦, nan 難, saan 山, chaan 産, hūaan 万, γūaan 還, waan 完, 'aan 鞍安

II faan 泛, saan 三, gaan 敢感, khaan 勘

I は山撰一二等字で、II は咸撰一二等字である（但し軽唇音は三等字）。“伴還完”は合口の一等字であり、うち“伴”は二等の“辦”と同綴である。

{an} : van 番

山撰三等軽唇音字。短母音 an の唯一の例である。雑字の八百文字表記においては、{aan} と {an} はどちらも同じ程度に大量に用いられている。来文の漢語音において {aan} が {an} よりもずっと多く用いられているのは、漢語の an 韻の主母音が長いこ

とを反映したものであろう。

3.2.4.2. {ään} : /ien/, /yen/

I pään 辺便片, mään 面, nään 年, lään 憐, sään 先線千, zään 前, kään 間件見,
yään 筵沿, ñään 員遠, 'ään 宴, wään 原

II yään 滄

III hngään~hwään 恩

I は山撰三四等字で、開口・合口ともにある。“間”は山撰二等開口字であり、韻母表記に {ään} が用いられるのは、牙喉音二等がすでに三四等と同韻になった状態を反映する。II は咸撰三等字である。以上は漢語音 [ien][yen] を表記したものと解し得る。III は、臻撰一等開口字。{ään} で表記されている理由は不明である。

3.2.4.3. {åån} : /uan/, /on(?) /

gåån 官館管冠罐, tåån 段

山撰一等合口字。同撰の二等合口字は {aan} が用いられる傾向があるが、{aan} の項にも述べたように、{aan} 表記にも一等合口字がある。従って、いわゆる“官関”の別が明瞭であるとは言い難い。

3.2.4.4. {iån} : /yen/

síån 宣

山撰三等合口字。雑字における {iån} 韻に対する音訳漢字は“線県店”など山咸撰三四等の開口字である(同韻類には {ään} も多用される)。3.2.3.3に論じておいた通り、{iå-} は二重母音 [i:ɐ]~[i:ə] あるいはその単母音化した段階 [e] を表す。従って、{iån} の八百語音としては [i:ə:n] や [e:n] が考えられる。これが合口の“宣”の音訳にも用いられたのは、八百語に [y] 母音が存在しないためである。

3.2.4.5. {iīn}, {īn} : /ən/

{iīn} :

I bīīn 本

II tīīn 登

I は臻撰一等合口、II は曾撰一等開口。I は円唇性が認められず、[u:n] のような音を表記したと解釈される。II は -ng 韻尾が -n に合流した方言的変種が反映されている。

{īn} :

I zīn 臣陳

II mīn 皿

I は臻撰三等開口で知章組字である。-i- 介音が反映されていないため、声母がそ

り舌音となり -i- 介音が脱落した段階にあった漢語音が表記された可能性がある。

Ⅱの“皿”は梗撰三等字で本来 -ng 韻尾であるが、現代北京語でも mǐn と発音されている。但し主母音が i である点は現代北京語と異なる。“皿”の百夷館来文の漢語音表記は min であり現代北京語と一致する一方、緬甸館来文の漢語音表記には min と共に mon(音価は [mən]) が見られ(西田(1972:207))、八百館来文の漢語と同じ変種が記録されている。

3.2.4.6. {ön} : /ən/

mön 門每

臻撰一等合口字。“每”は“他每”に見られる例であり、現代語の“們”にあたる。この類の韻母は {iin} と書かれる(cf:3.2.4.5、“本”bīn)ことから見て、八百語の {i}[u] にも {ö}[ə](~[ɤ]) にも聞き取られる主母音、即ち現代北京語の en 韻とほぼ同じ音色の主母音を持っていたのであろう。

3.2.4.7. {in}、{iin} : /in/

{in} :

I sin 進尽辛新信, kin 巾斤近, yin 因銀人, 'in 印

II sin 心, kin 今金禁

{iin} :

I hiin 欣, liin 隣, giin 緊

II giin 錦

{in} と {iin} はいずれも同じ範囲の漢語韻母を表記している：Iは臻撰三等開口、IIは深撰三等開口。長母音で表記された字より短母音で表記された字の方が多い(短と長の比率は16:4)が、雑字における八百語音表記では長母音も短母音も多く用いられ、むしろ長母音の方がやや上回るほどである。従って、漢語のこの韻母の表記としては、短母音が積極的に選択され用いられたと見てよい。

3.2.4.8. {uun}、{un} : /un/

{uun} :

I juun 准

II ñuun 絨蓉

{un} :

I wun 文聞

II ñun 絨

III zun 祖

Iは臻撰三等合口、IIは通撰三等合口。IIには -ng が -n に合流した様相が見られ

るがこれは全体としては少数派であり、通撰字は大半が末子音 {ng} を以て表記されている。“絨”は ñuun、ñun 両様に表記され、後者の出現度数が多い (ñun は3例、ñuun は1例)。

{un} のⅢは韻母の例外的表記で遇撰一等である。韻尾 -n が表記されている点が不可解で、誤記と思われるが、全ての表記例が zun となっている。

3. 2. 5. -m 韻尾

韻尾として {m} が用いられた全ての例を下に掲げる。

{aam} : naam 南

{aām} : brāām 盆, γāām 歡

{ääm} : th₁ääm 天

末子音 {-m} が用いられた例は4例とごく少なく、しかも必ずしも中古の -m 韻尾字とは対応しない (“南”だけが -m 韻尾字で、他は -n 韻尾字である)。表記様相全体からみて、この音訳の基礎にある漢語音では、-m がすでに -n に合流していたと考えられる。雑字においては、-m に終わる八百語の音節は基本的に臻山深咸の各撰の舒声字で音訳されている。来文において漢語音の八百文字音写を行った人物は、雑字におけるこうした対応関係を逆利用することができた。漢語音の描写に少数の {-m} が出現する理由は、八百館訳語に限って言えば、その漢語基礎方音に -m 韻尾が残存していたからではなく、雑字に現れた音訳関係を応用した結果であろうと考えられる。

“盆”は臻撮合口一等 (魂韻) であるから、現代音 pén を参照すれば、母音表記として {i} や {ö} のような音色が期待されるが、円唇母音 {â} の長母音が現れている。{â} は後に見るように通撰一等舒声字の表記にも現れ、その中には“捧蒙”のように現代北京語では eng 韻になっているものも含まれている。“盆”や“捧蒙”の例は、これらの韻母の合口性が唇音声母下でも失われていない段階の反映とみられる。但し、すでに挙げた bīn 本、mön 門のように、合口性がすでに失われた段階を示す表記もある。

3. 2. 6. -ng 韻尾

3.2.6.1. {aang}、{ang} : /aŋ/, /iaŋ/, /uaŋ/

{aang} : chaang 常床, faang 方房, γāang 皇黃, jaang 張漲掌帳降, raang 兩, saang 將相象賞上, waang 王望

{ang} : yang 仰

江宕撰一二三等字。開口、合口ともにあるが、莊組で近代官話において -u- 介音が発生する“床”の字には -u- の要素が見られない。その理由は未詳であるが、表記対象の漢語音において u 介音がなかったとすぐさま断定することはできない。{chūaang}

のような音節を八百語が許容しなかったために -u- 介音が綴り字に反映されなかった可能性がある。同様に、三等で漢語側に -i- 介音が期待される“降両将相象”にも -i- の要素が見られないが、これは3.2.1.1で既に述べているように、八百語に「子音+i+aa」という音連続が存在しないためである。

{ang} は一例だけで、用例数の上で {aang} とは著しい対照をなす。{an} と {aan} の分布にも同様の傾向が見られる (3.2.4.1)。漢語音の ang 韻の主母音が長かったことの反映であろう。

3.2.6.2. {ääng} : /i(ə) ŋ/

sääng 青, zääng 情

梗撰三四等開口。この漢語韻類は通常、{ing} {iing} で表記される(下記参照)。**{ääng}** 表記は例外的であり、表記をそのまま解すれば [ɛ:ŋ] となるので、やや不可解である。但し雑字側には「開設」(760) : 列不令 rääk plääng の“令”、「管理」(769) : 定彝 tään plääng の“定”など、ääng が梗撰三四等開口字と対応する例があり、このような例が逆利用された可能性がある。

3.2.6.3. {ång} : /uŋ/

vång 捧, mång 蒙, tång 東, chång 充, jång 重, gång 孔, sång 送

通撰一(三)等字。å の音価は [ɔ] であるとされるが、漢字音としてはそれより狭い [o] が期待される。本韻類は {uung} {ung} によって表記された例もあって、{å} と {u} と、勢力は伯仲している。雑字に見える八百語には {oong} という韻もあるが、漢語音表記には何故か用いられない。

3.2.6.4. {ång} : /uŋ/

kång 功

通撰一等字。短母音の例はこの一例だけである。

3.2.6.5. {iing}、{ing} : /iŋ/

{iing} :

I giing 景, yiing 行

II ziing 曾

I は梗撰 (“景” は三等、“行” は二等) である。II は曾撰一等である。II は母音が不可解であり、あるいは zīng の誤記かもしれない。{i} と {ii} は字形がよく似ている。

{ing} :

I ping 并, ming 明, ding 頂, ling 綾零, sing 靖姓聖, king 京経, ying 応

II ming 民

I は梗撰開口三四等及び曾撰開口三等字。II は臻撰三等開口字。本資料においては、

すでに見たように、-ng 韻尾が -n に合流したものが少数見られるが、-n 韻尾が -ng に合流しているのは“民”のみである。

書母の“聖”が *siŋ* と表記されているのは“収”が *siw* と表記されている例 (3.2.3.4 参照) と並んで、三等の -i- 介音の保持の例として注意される。

3.2.6.6. {iŋ} : /əŋ/

I *dīŋ* 等, *nīŋ* 能

II *sīŋ* 生

I は曾撰一等開口、II は梗撰二等開口。長母音 {iŋ} の表記例を欠く点が注意される (但し、{iŋ} (3.2.4.5) には曾撰一等開口“登”の例があった)。II の“生”*sīŋ* は前出“聖”*siŋ* (3.2.6.5) と対照させるとき興味深い。声母がそり舌化していたとも解しうるし、さらに“非そり舌化”して /s/ となった段階を示しているとも解しうる。八百語はじめタイ諸語は一般に齒擦音の調音点が一系統なので、漢語音が [s][ʃ][ç][ʂ] のどれであっても {s} を表記に用いるほかない。

3.2.6.7. {uŋ}、{uŋ} : /uŋ/, /yŋ/

{uŋ} :

I *yuŋ* 用

II *ŋuŋ* 永

I は通撰、II は梗撰合口で、いずれも三等字である。曾梗撰合口舒声の通撰への合流は元代の『蒙古字韻』や『中原音韻』においてすでに見られ、明代には更に進行した。本資料においても、両者の漢語音に違いはなかったと見られる。

{uŋ} : *chunŋ* 衝, *dhunŋ* 通同, *ɣunŋ* 紅, *kunŋ* 貢

通撰一等字。同韻類は {âŋ}、{âŋ} によっても表記されるが、書き分けの条件は不明である。

3. 2. 7. -k 韻尾

非常に少ないものの、-k 韻尾がついた表記例が、八百文字の異なり音節数として4例、漢字の異なり字数としては6例ある。その中には中古音において実際に -k 韻尾を帯びていた字もあるので、あるいは南方方言の混入である可能性も排除できないが、実際の漢語音の反映ではない可能性が大きい。

châak 雀

宕撰三等開口入声。中古音では実際に -k 韻尾を帯びていた。表記上 [tsho:k] のような音形が読み取れるが、実際には [tshio(?)] のような漢語音を写したものであろう。

pök 白百

梗撰二等開口入声。中古音では実際に -k 韻尾を帯びていた。表記上 [pɔ:k] のような

音形が読み取れるが、実際の漢語音は [px(?)] であっただろう。

dhuuk 途土, luuk 路

遇撰一等合口舒声。この韻類は中古音まで溯っても -k 韻尾を帯びたことはないはずである。実際の漢語音は [thu][lu] であっただろう。

4. おわりに

『八百館訳語』は、雑字部分の音訳漢字が漢語音の資料になるが、今回ベルリン本の来文の中に漢語音を八百文字で表記した部分があることが明らかになったことから、八百文字表記漢語と漢字表記八百語を同時に含む双方向的な対音資料として扱うべきものであることが認識された。すでに述べたように、『百夷館訳語』、『緬甸館訳語』も同様の双方向対音資料であり、また『西番館訳語』や『高昌館訳語』の来文にも、漢語音を民族文字で記したものが大量に混入している³⁶。一方、乙種本『暹羅館訳語』の来文には、暹羅文字表記漢語はあまり多くない。本稿筆者は従来、明代漢語音の資料としての乙種本華夷訳語について、雑字の音訳漢字にのみ注目してきたが、来文にも少なからぬ漢語音資料があることが明らかになりつつあり、音訳漢字から帰納される音韻情報との突き合せや、異なる語種の『訳語』相互間の比較が今後の課題となる。

参考文献

- 石田 幹之助(1930/1973)「女真語研究の新資料」。もと『桑原博士還暦記念東洋史論叢』所収、今、『東亜文化史叢考』、財団法人東洋文庫、1973年3月、3-69頁所収による。
- 泉井 久之助
(1949)「百夷館雑字並に来文の解説」。『比較言語学研究』、創元社、1949年6月、193-304頁。
(1953)「八百館雑字ならびに来文の解説」。『京都大学文学部研究紀要』第2、1953年3月、1-109頁。
- 遠藤 光暁(1984)《〈翻译老乞大・朴通事〉里的汉语声调》、《语言学论丛》第13輯、商务印书馆、162-182頁。
- 荻原 弘明(1965)「東洋文庫本華夷訳語・緬甸館雑字——附、訳史紀餘・緬甸国書——についての覚書(緬甸史雑考Ⅲ)」。『鹿大史学』13、1-28頁。
- 神田 喜一郎(1927/1949)「明の四夷館について」。もと『史林』12:4、1927年10月。今、『東洋史説林』、弘文堂、1949年7月(再版)、1-23頁所収による。

³⁶ 莊(2018)は、『高昌館課』の名で呼ばれる高昌館来文のテキストに見られるウイグル文字表記漢語の音韻を論じている。

- 邢 公畹 (1999) 《汉台语比较手册》，商务印书馆。
- 更科 慎一(近刊)「『百夷館訳語』来文に見られる明代漢語の表音システムについて」、
『東アジア文化の歴史と現在』掲載予定。
- Jana Igunma, 2010, A Note on the “Pa Po - Chinese glossary” in the Hua Yi yi yu, *Southeast Asia Library Group Newsletter*, No. 42, pp.8-21.
- 銭 曾怡 (2010) 《汉语官话方言研究》，齐鲁书社。
- 莊 子儀 (2018) 「『高昌館課』中的漢回對音」。中華民國聲韻學會『聲韻論叢』第21輯、
臺灣學生書局、103-140頁。
- 西田 龍雄
(1972) 『緬甸館訳語の研究』、松香堂。
(2000) 『東アジア諸言語の研究 I 巨大言語群——シナ・チベット語族の展望』。
京都大学学術出版会。
(2001a) 「八百文字」、河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著 (2001) 『世界文字辞典』
(言語学大辞典別巻)、三省堂、741-745頁所載。
(2002b) 「東アジアの諸文字」、同上、782-799頁所載。
- 山本 達郎 (1936) 「華夷訳語にみえたる百夷及び八百の文字 —タイ族のアルファ
ベットに関する一研究—」。『東方学報 東京』第六冊、763-787頁。
- 李 方桂 (1940/2005) 《龍州土語》，もと中央研究院歴史語言研究所『單刊』甲種之十六。
今《李方桂全集》3，清华大学出版社，2005年による。
- Li, Fang Kui, 1977, *A Handbook of Comparative Tai*, The University Press of Hawaii.
- 陸 志韋 (1946/1988) 《記徐孝重訂司馬温公等韻圖經》，もと《燕京學報》32。今《陆
志韦近代汉语音韵论集》，商务印书馆，1988年、54-84頁所収による。
- 劉 勳寧 (1995/1998) 《再论汉语北方方言的分区》，もと《中国语文》1995年第6期。今《现
代汉语研究》，北京语言文化大学出版社，1998年、56-72頁所収による。

【本研究は JSPS 科研費 JP20K00545 の助成を受けたものです。】